

横 笛

渋谷栄一 訳

第一章 光る源氏の物語 薫の成長

「 第一段 柏木一周忌の法要 」

故権大納言があつけなくお亡くなりになつた悲しさを、いつまでも残念なことに、恋い偲びなされる方が多かつた。六条院におかれても、特別の關係がなくてさえ、世間に人望のある人が亡くなるのは、惜しみなされるご性分なので、なおさらのこと、この人は、朝夕に親しくいつも参上しいしい、誰よりもお心を掛けていらしたので、どうにもけしからぬと、お思ひ出しなされることはありながら、哀悼の気持ちは強く、何かにつけてお思ひ出しになる。

「 一周忌にも、誦経などを、特別おさせになる。何事も知らない顔の幼い子のご様子を御覧になるにつけても、何といつてもやはり不憫でならないので、内中密かに、また志立てられて、黄金百両を別にお布施あそばすのであつた。父大臣は、事情も知らないで恐縮してお礼を申し上げさせなされる。」

大将の君も、供養をたくさんなさり、ご自身も熱心に法要のお世話をなさる。あの一宮に對しても、一周忌に当たつてのお心遣いも深くお見舞い申し上げなされる。兄弟の君たちよりも優れたお気持ちのほどを、とてもこんなにあまでとお思ひ申さなかつたと、大臣、母上もお喜び申し上げなされる。亡くなつた後にも、世間の評判の高くていらつしやつたことが分かるので、ひどく残念がり、いつまでも恋い焦がれること、限りがない。

「 第二段 朱雀院、女三の宮へ山菜を贈る 」

山の帝は、二の宮も、このように人に笑われるような境遇になつて物思いに沈んでいらつしやるといい、入道の宮も、現世の普通の人らしい幸せは、一切捨てておしまひになつたので、どちらも物足りなくお思ひなされるが、総じてこの世の事を悩むまい、と我慢なされる。御勤行をなさる時にも、「同じ道をお勤めになつてゐるのだらう」などとお思ひやりになつて、このように尼になられてからは、ちよつとしたことにつけても、絶えずお便りを差し上げなされる。

お寺近くの林に生え出した筍、その近辺の山で掘つた山芋などが、山里の生活では風情があるものなので、差し上げようとなさつて、お手紙を情愛こまやかに書きになつた端に、

「 春の野山は、露がかかつてはつきりしません、深い心をこめて掘り出されたものでございます。」

この世を捨ててお入りになつた道はわたしより遅くとも、同じ極楽浄土をあなたも求めて来て下さい。とても難しい事ですよ。」

とお便り申し上げなされたのを、涙ぐんで御覧になつてゐるところに、大殿の君がお越しになつた。いつもと違つて、御前近くに櫛子がいくつもあつた。何だらう、おかしいな」と御覧になると、院からのお手紙なのであつた。御覧になると、とても胸の詰まる思ひがする。

「 わが命も今日か、明日かの心地がするのに、思うままにお会いすることができないのが辛いことです。」

などと、情愛こまやかに書きあそばしていらつしやつた。この、同じ極楽浄土へ御一緒にとのお歌を、特別に趣があるものではない、僧侶らしい言葉遣いであるが、いかに、そのようにお思ひのことだらう。自分までが疎略にお世話してゐるといふふうをお目に入れ申して、ますます御心配あそばされることになるうことを、おいたわしい」とお思ひになる。

お返事は恥ずかしげにお書きになつて、お使いの者には、青鈍の綾を一襲をお与えなされる。書き変えなされた紙が、御几帳の端からちらつと見えるのを、取つて御覧になると、ご筆跡はとても頼りない感じで、

「 こんな辛い世の中とは違つ所に住みたくて、わたしも父上と同じ山寺に入

りやういあります」

「心配なさっている様子なのに、ここと違う住み処を求めていらっしやる、まことに嫌な、辛いことです」

と申し上げなされる。

今では、まともにお顔をお合わせ申されず、とても美しくかわいらしいお額髪、お顔の美しさ、まるで子供のようにお見えになって、たいそういじらしいのを拝見なされるにつけては、どうして、このようになってしまったことか」と、罪悪感をお感じになるので、御几帳だけを隔てて、また一方でたいそう隔たつた感じで、他人行儀にならない程度に、お扱い申し上げていらっしやるのだった。

「第三段 若君、竹の子を噛る」

若君は、乳母のもとでお寝みになっていたが、起きて這い出しなさつて、お袖を引っ張りまわりついていらっしやる様子、とてもかわいらしい。

白い羅に、唐の小紋の紅梅のお召し物の裾、とても長くだらしく引きずられて、お身体がすっかりあらわに見えて、後ろの方だけが着ていらっしやる恰好は、幼児の常であるが、とてもかわいらしく色白ですんなりとして、柳の木を削つて作つたようである。

頭は露草で特別に染めたような感じがして、口もとはかわいらしく艶々として、目もとがおつとりと、気がひけるほど美しいのなどは、やはりとてもよく思い出さずにはいられないが、

「あの人は、とてもこのようにきわだった美しさはなかったが、どうしてこんなに美しいのだろう。母宮にもお似申さず、今から気品があり立派で、格別にお見えになる様子などは、自分が鏡に映つた姿にも似てはいないこともないな」というお気持ちになる。

やつとよちよち歩きをなさる程である。この筍が欄子に、何であるのか分からず近寄つて来て、やたらにとり散らかして、食いかじつたりなどなさるので、

「まあ、お行儀の悪い。いけません。あれを片づけなさい。食べ物に目がなくていらっしやるど、口の悪い女房が言つといけない」

と云つて、お笑いになる。お抱き寄せになつて、

「若君の目もとは普通と違ふな。小さい時の子を、多く見ていないからだろうか、これくらいの時分は、ただあどけないものとはかり思つていたが、今からとても格別すぐれているのが、厄介なことだ。女宮がいらっしやるよつなところに、このような人が生まれて来て、厄介なことが、どちらにとつても起こるだろうな。」

ああ、この人たちが育つて行く先までは、見届けることができようか。花の盛りをめくり逢ふことは、寿命あつてのことだ」

と云つて、じつとお見詰め申していらっしやる。

「何とまあ、縁起でもないお言葉を」

と、女房たちは申し上げる。

齒の生えかけたところに噛み当てようとして、筍をしつかりと握り持つて、よだれをたらたらと垂らしてお齧りになっているので、

「変わった色好みだな」とおつしやつて、

「いやなことは忘れられないがこの子は、かわいくて捨て難く思われることだ」

と、引き離して連れて来て、お話しかけになるが、にこにこしていて、何とも分ならず、とてもそそくさと、這い下りて動き回つていらっしやる。月日が経つにつれて、この君がかわいらしく不吉なまでに美しく成長なさつていくので、本当に、あの嫌なことが、すべて忘れられてしまふのである。

「この人がお生まれになるための縁で、あの思いがけない事件も起こつたのだろう。逃れられない宿命だつたのだ」

と、少しはお考えが改まる。ご自身の運命にもやはり不満のところが多かつた。

「大勢集つていらっしやるご夫人方の中でも、この宮だけは、不足に思つところもなく、宮ご自身の様子も、物足りないと思つところもなくいらっしやるはずなのに、このように思いもかけない尼姿で拝見するとは」
とお思いになるにつけて、過去の二人の過ちを許し難く、今も無念に思われるのであつた。

「第一段 夕霧、一条宮邸を訪問」

大将の君は、あの臨終の際に言い遣した一言を、心ひそかに思い出し思出ししては、「どうしてか」と、とてもお尋ね申し上げたく、お顔色も伺いたいのだが、うすうす思い当たられる節もあるので、かえって口に出して申し上げるのも具合が悪くて、どのような機会に、この事の詳しい事情をはつきりさせ、また、あの人の思いつめていた様子をお耳に入れようか」と、思い続けていらっしやる。

秋の夕方の心寂しいところに、一条の宮をどうしていられるかとご心配申し上げなさって、お越しになった。くつろいで、ひっそりとお琴などを弾いていらっしやうとしたところなのであろう。奥へ片づけることもできず、そのままその南の廂間にお入れ申し上げなさった。端の方にいた人たちが、いざって入って行く様子がはつきり分かって、衣ずれの音や、あたりに漂う香の匂いも薫り高く、奥ゆかしい感じである。

いつものように、御息所がお相手なさって、昔話をあれこれと交わし合いなさる。ご自分の御殿は、明け暮れ人が大勢出入りして、もの騒がしく、幼い子供たちが、大勢寄って騒々しくしていらっしやるのにお馴れになっているので、とても静かで心寂しい感じがする。ちよつと手入れも行き届いてない感じがするが、上品に気高くお暮らしになって、前栽の花々、虫の音のたくさん聞こえる野原のように咲き乱れている夕映えを、見渡しなさる。

「第二段 柏木遺愛の琴を弾く」

和琴をお引き寄せになると、律の調子に調えられていて、とてもよく弾きこんであるのが、人の移り香がしみこんでいて、心惹かれる感じがする。「このようなくらゝに、慎みのない好き心のある人は、心を抑えることができなくて、見苦しい振る舞いにも出て、あつてはならない評判を立てるものだ」

などと、思い続けながら、お弾きになる。

故君がいつもお弾きになっていた琴であった。風情のある曲目を一つ一つ、少しお弾きになって、

「ああ、まことにめつたにない素晴らしい音色をお弾きになったものだが、このお琴にも故人の名残が籠もつておりましよう。お聞かせ願いたいものだ」とおつしやる。

「主人が亡くなりまして後より、昔の子供遊びの時の記憶さえ、思い出しなさらなくなつてしまつたようです。院の御前で、女官たちがそれぞれ得意なお琴を、お試し申されました時にも、このような方面は、しつかりしていらっしやると、ご判定申されなさつたようでしたが、今は別人のようにほんやりなさつて、物思いに沈んでいらっしやるようなので、悲しい思いを催す種というように拝見しております」

とお答え申し上げなさると、

「まことにこもつともなお気持ちです。せめて終わりがあれば」と、物思いに沈んで、琴は押しやりなさつたので、

「あの琴を、やはりそういふことなら、音色の中に伝わることもあろうかと、聞いて分かるように弾いて下さい。何やら気も晴れずに物思いに沈み込んでいる耳だけでも、せめてさうぱりさせましよう」と

と申し上げなさるので、

「ご夫婦の仲に伝わる琴の音色は、特別でございませう。それを伺いたいとおつしやうて、御簾の側近くに和琴を押し寄せなさるが、すぐにはお引き受けなさるはずもないことなので、無理にお願いなさらない。

「第三段 夕霧、想夫恋を弾く」

月が出て雲もない空に、羽をうち交わして飛ぶ雁も、列を離れないのを、羨ましくお聞きになつているのであろう。風が肌寒く感じられ、何となく寂しさに心動かされて、箏の琴をたいそうかすかすかにお弾きになつていても、深みのある音色なので、ますます心を引きつけられてしまつて、かえつて物足りない思いがするので、琵琶を取り寄せて、とても優しい音色に想

夫恋」をお弾きになる。

「お気持ちを探してのようなのは、恐縮ですが、この曲目なら、何かおっしゃって下さるかと思ひまして」

とおっしゃって、しきりに御簾の中に向かつて催促申し上げなさるが、和琴を所望された以上に、気が引けるお相手なので、宮はただ悲しいとばかりお思い続けていらつしやるので、

「言葉に出しておつしやらないのも、おつしやる以上に、深いお気持ちなのだ、慎み深い態度からよく分かります」

と申し上げなさると、わずかに終わりの方を少しお弾きになる。

「趣深い秋の夜の情趣はぞんじておりますが、靡き顔に琴をお弾き申したでしようか」

もつと聞いていたいほどであるが、そのおつとりした音色によつて、昔の人が心をこめて弾き伝えてきた、同じ調子の曲目といつても、しみじみとまたぞつとする感じで、ほんの少し弾いてお止めになったので、恨めしいほどに思われるが、

「物好きな心を、いろいろな琴を弾いてお目に掛けてしまいました。秋の夜に遅くまでおりますのも、故人の咎めがあるうかとご遠慮致して、退出致さねばなりません。また改めて失礼のないよう気をつけてお伺い致そうと思ひますが、このお琴の調子を変えずにお待ち下さいませんか。とかく思ひもよらぬことが起こる世の中ですから、氣掛かりでなりません」

などと、あらわにはないが、心の内をほめかしてお帰りになる。

「第四段 御息所、夕霧に横笛を贈る」

「今夜の風流なお振る舞いについては、誰もがお許し申すはずのことでございます。これということもない昔話にばかり紛らわせなつて、寿命が延びるまでお聞かせ下さらなかつたのが、とても残念です」

と言つて、御贈り物に笛を添えて差し上げなさる。

「この笛には、実に古い由緒もあるように聞いておりましたが、このような蓬生の宿に埋もれているのは残念に存じまして、御前駆の負けないほどにお吹き下さる音色を、ここからでもお伺いしたく存じます」

と申し上げなさると、

「似つかわしくない隨身でございます」

とおっしゃつて、御覽になると、この笛もなるほど肌身離さず愛玩しては、

「自分でも、まうたくこの笛の音のあらん限りは、吹きこなせない。大事にしてくれる人に何とか伝えたいものだ」

と、柏木が時々愚痴をこぼしていらつしやつたのを思い出しなさると、さらに悲しみが胸に迫つて、試みに吹いてみる。盤渉調の半分ばかりでお止めになつて、

「故人を偲んで和琴を独り弾きましたのは、下手でも何とか聞いて戴けました。この笛はとても分不相応です」

と言つて、お出になるので、

「涙にくれていますこの荒れた家に昔の秋と変わらない笛の音を聞かせて戴きました」

と、内側から申し上げなつた。

「横笛の音色は特別昔と変わりませんが亡くなつた人を悼む泣き声は尽きません」

出て行きかねていらつしやると、夜もたいそう更けてしまつた。

「第五段 帰宅して、故人を想う」

殿にお帰りになると、格子などを下ろさせて、皆お寝みになつていた。

「この宮に」ご執心申されて、あのよう」ご熱心でいらつしやるのだ」

などと、誰かがご報告したので、このように夜更けまで外出なさるのも憎らしくて、お入りになつたのも知つていながら、眠つたふりをしていらつしやるのであるう。

「いい人とわたしと一緒に入るあの山の」

と、声はとても美しく独り歌つて、

「これは、またどうして、こつ固く鍵を閉めているのだ。何とまあ、うつとしいことよ。今夜の月を見ない所もあるのだなあ」

と、不満げにおつしやる。格子を上げさせなつて、御簾を巻き上げな

どなさつて、端近くに横におなりになった。

「このように素晴らしい月なのに、気楽に夢を見ている人が、あるものですか。少しお出になりなさい。何と嫌な」

などと申し上げなさるが、面白くない気がして、知らぬ顔をなさつてゐる。若君たちが、あどけなく寝惚けている様子などが、あちらこちらにして、女房も混み合つて寝ている、とてもにぎやかな感じがするので、さきほどの所の様子が、思い比べられて、多く違つてゐる。この笛をちよつとお吹きになりながら、

「どのように、わたしが立ち去つた後でも、物思いに耽つていらつしやることだろう。お琴の合奏は、調子を変えずなさつていらつしやるのだろう。御息所も、和琴の名手であつた」

などと、思いをさせて臥せつていらつしやる。

「どうして、故君は、ただ表向きの心配りは、大切にお扱い申し上げていながら、大して深い愛情はなかつたのだろう」

と、考えるにつけても、大変いぶかしく思わずにはいらつしやれない。

「実際会つて見て器量がよくないとすると、たいそうお気の毒なことだな。世間一般の話でも、最高に素晴らしいという評判の人は、きっとそんなこともあるものだ」

などと思つにつけ、ご自分の夫婦仲が、その気持ちを顔に出して相手を疑うこともなくて、仲睦まじくなつた歳月のほどを数えると、しみじみと感慨深く、とてもこう我が強くなつて勝手に振る舞うようになつたのも、無理もないことと思われなかつた。

「第六段 夢に柏木現れ出る」

少し寝入りなかつた夢に、あの衛門督が、まるで生前の袿姿で、側に座つて、この笛を取つて見ている。夢の中にも、故人が、厄介にも、この笛の音を求めて来たのだ、と思つてゐると、

「この笛の音に吹き寄る風は同じことなら、わたしの子孫に伝えて欲しいものだ。その伝えたい人は違つたのだ」

と言つので、尋ねようと思つた時に、若君が寝おびえて泣きなさるお声

に、目が覚めておしまいになつた。

この若君がひどく泣きなさつて、乳を吐いたりなさるので、乳母も起き騒ぎ、母上も御殿油を近くに取り寄せさせなさつて、額髪を耳に挟んで、せわしげに世話して、抱いていらつしやる。とてもよく太つて、ふつくらとした美しい胸を開けて、乳などをお含ませになる。子供もとてもかわいらしくいらつしやる若君なので、色白で美しく見えるが、お乳はまったく出ないのを、気休めにあやしていらつしやる。

男君も側にお寄りになつて、「どうしたのだ」などとおつしやる。魔除の撒米をし米を散らかしなどして、とり騒いでゐるので、夢の情趣もどこかへ行つてしまふことである。

「苦しそつに見えますわ。若い人のような恰好でうるつきなさつて、夜更けのお月見に、格子なども上げなかつたので、例の物の怪が入つて来たのだ、しよう」

などと、とても若く美しい顔をして、恨み言をおつしやるので、にっこりして、

「妙な、物の怪の案内とは。わたしが格子を上げなかつたら、道がなくて、おつしやる通り入つて来られなかつたでしょう。大勢の子持ちの母親におなりになるにつれて、思慮深く立派なことをおつしやるようになつた」
と云つて、ちらりと御覧になる目つきが、たいそう氣後れするほど立派なので、それ以上は何ともおつしやらず、

「さあ、もうお止めなさいまし。みつともない恰好ですから」

と云つて、明るい灯火を、さすがに恥ずかしがつていらつしやる様子も憎くない。ほんとうに、この若君は苦しがつて、一晚中泣きむづかつて夜をお明かしになつた。

第三章 夕霧の物語 匂宮と薫

「第一段 夕霧、六条院を訪問」

大将の君も、夢を思い出しなさると、

「この笛は厄介なものだな。故人が執着していた笛の、行くべき所ではなかったのだ。女方から伝わっても意味のなことだ。どのように思ったことだろう。この世に、物の数にも入らない些事も、あの臨終の際に、一心に恨めしく思ったり、または愛情を持つたりしては、無明長夜の闇に迷うということだ。そうだからこそ、どのようなことに執着は持つまいと思つのだ」などと、お考え続けなされて、愛宕で誦経をおさせになる。また、故人が帰依していた寺にもおさせになつて、

「この笛を、わざわざ御息所が特別の遺品として、譲り下さつたのを、すぐにお寺に納めるのも、供養になるとは言つものの、あまりにあつけなさきよ」

と思つて、六条院に参上なされた。

女御の御方にいらつしやる時なのであつた。三の宮は、三歳ほどで、親王の中でもかわいらしくいらつしやるのを、こちらではまた特別に引き取つてお住ませなさつていたのであつた。走つておいでになつて、

「大將よ、宮をお抱き申して、あちらへ連れていらつしやい」

と、自分に敬語をつけて、とても甘えておつしやるので、ほほ笑んで、「いらつしやい。どうして御簾の前を行きましょうか。たいそう無作法でしよ」

と言つて、お抱き申してお座りになると、
「誰も見ていません。わたしが、顔を隠そう。さあさあ」

と言つて、お袖で顔をお隠しになるので、とてもかわいらしいので、お連れ申し上げなさる。

「第二段 源氏の孫君たち、夕霧を奪い合う」

こちら方にも、二の宮が、若君と一緒になつて遊んでいらつしやるのを、かわいがつておいであそばすのであつた。隅の間の所にお下ろし申し上げなさるのを、二の宮が見つつけなされて、

「わたしも大將に抱かれたい」

とおつしやるのを、三の宮は、

「わたしの大將なのだから」

と言つて、お放しにならない。院も御覧になつて、

「まことにお行儀の悪いお一方ですね。朝廷のお身近の警護の人を、自分の隨身にしようとする争いなさるとは。三の宮が、特にいじわるでいらつしやいます。いつも兄宮に負けまいとなさる」

と、おたしなめ申して仲裁なさる。大將も笑つて、

「二の宮は、すつかりお兄様らしく弟君に譲つて上げるお気持ち都十分におりのようです。お年のわりには、こわいほどご立派にお見えになります」などと申し上げなさる。ほほ笑んで、どちらもとてもかわいらしいとお思い申し上げあそばしていらつしやつた。

「見苦しく失礼なお席だ。あちらへ」

とおつしやつて、お渡りになるとすると、宮たちがまとわりついて、まつたくお離れにならない。宮の若君は、宮たちとご同列に扱つべきではないと、ご心中にはお考えになるが、かえつてそのお気持ち、母宮が、心にとがめて気を回されることだろうと、これもまたご性分で、お気の毒に思われなさるので、とても大切にお扱い申し上げなさる。

「第三段 夕霧、薫をしみじみと見る」

大將は、この若君を、まだよく見ていないな」とお思いになつて、御簾の間からお顔をお出しになつたところを、花の枝が枯れて落ちてゐるのを取つて、お見せ申して、お呼びなさると、走つていらつしやつた。

二藍の直衣だけを着て、たいそう色白で光輝いてつやつやとかわいらしいこと、親王たちよりもいっそうきめこまかに整つていらつしやつて、まるまると太りおきれいである。何となくそう思つて見るせいか、目つきなど、この子は少しきつく才走つた様子は衛門督以上だが、目尻の切れが美しく輝いてゐる様子など、とてもよく似ていらつしやつた。

口もとが、特別にはなやかな感じがして、ほほ笑んでゐるところなどは、自分がふとそう思つたせいなのか、大殿はきつとお気づきである。「と、ますますご心中が知りたい。」

宮たちは、親王だと思つてせいから気高くもみえるものの、世間普通のかわいらしい子供とお見えになるのだが、この君は、とても上品な一方で、特

別に美しい様子なので、「ご比較申し上げながら、

「何と、かわいそうな。もし自分の疑いが本当なら、父大臣が、あれほどすっかり気落ちしていらして、

『子供だと名乗って出て来る人さえないことよ。形見と思って世話する者でもせめて遣してくれ』

と、泣き焦がれていらしたのに、お知らせ申し上げないのも罪なことではないか」などと思うが、「いや、どうしてそんなことがありえよう」

と、やはり納得がゆかず、推測のしようもない。氣立てまでが優しくおとなしくて、じゃれていらっしやるので、とてもかわいらしく思われる。

「第四段 夕霧、源氏と対話す」

対へお渡りになったので、のんびりとお話など申し上げていらっしやるうちに、日も暮れかかって来た。昨夜、あ的一条宮邸に参った時に、おいでになつていた様子などを申し上げなされたところ、ほほ笑んで聞いていらっしやる。氣の毒な故人の話、関係のある話の節々には、あいずちなごを打ちなされて、

「あの想夫恋を弾いた氣持ちは、なるほど、昔の風流の例として引き合いにしてもよさそうところであるが、女は、やはり、男が心を動かす程度の風流があつても、いい加減なことでは表わすべきではないことだと、考えさせられることが多いな。

故人への情誼を忘れず、このように末長い好意を、先方も知られたとならば、同じことなら、きれいな氣持ちで、あれこれとかかわり合つて、面白いくない間違いを起こさないので、どちらにとつても奥ゆかしく、世間体も穏やかなことであるつと思つ」とおっしゃるので、「そのとおりだ。他人へのお説教だけはしっかりしたものだ、このような好色の道はどうか」と、拝見なさる。

「何の間違いがございませう。やはり、無常の世の同情から世話をするようになりました方々に、当座だけのいたわりで終わつたら、かえつて世間」

「にありふれた疑いを受けましようと思つてです。
想夫恋は、ご自分の方から弾き出しなされたのなら、非難されることにもなりましようが、ごこのついでに、ちょっとお弾きになされたのは、あの時

にふさわしい感じがして、興味がございました。

何事も、人次第、事柄次第の事でございませう。年齢なども、だんだんと、若々しいお振る舞いが相応しいお年頃ではいらっしやいませんし、また、冗談を言つて、好色がましい態度を見せることに、馴れておりませんので、お氣を許されるでしょうか。大体が優しく無難なお方のご様子でいらつしやいました」

などと申し上げなされていられるうちに、ちょうどよい機会を作り出して、少し近くに寄りなされて、あの夢のお話を申し上げなされると、すぐにはお返事をなさらずに、お聞きあそばして、お氣づきあそばすことがある。

「第五段 笛を源氏に預ける」

「その笛は、わたしが預からねばならない理由がある物だ。それは陽成院の御笛だ。それを故式部卿宮が大事になさつていたが、あの衛門督は、子供の時から大変上手に笛を吹いたのに感心して、故式部卿宮が萩の宴を催された日、贈り物にお与えになつたものだ。女の考えて深い由緒もよく知らず、そのように与えたのだから」

などとおっしゃつて、
「子孫に伝えたいということとは、また他に誰と間違えようか。そのように考えたのだから」などとお考えになつて、「この君も思慮深い人なので、氣づくこともあろうな」とお思いになる。

そのご表情を見ていると、ますます遠慮されて、すぐにはお話し申し上げなされないが、せめてお聞かせ申そうとの思いがあるので、ちょうど今この機会に思い出したように、はつきり分からないふりをして、

「臨終となつた折にも、お見舞いに参上いたしましたところ、亡くなつた後の事を遺言されました中に、これこれしかじかと、深く恐縮申している旨を、繰り返しましたので、どのようなことでしようか、今に至までその理由が分かりませんので、氣に掛かつていられるのでございます」

と、いかにも腑に落ちないように申し上げなされるので、

「やはり知つていられるのだな」
とお思いになるが、どうして、そのような事柄をお口にすべきではないので、暫くは分からないふりをして、

「そのような、人に恨まれるような事は、いつしただろつかと、自分自身でも思い出す事ができないな。それはそれとして、そのうちゆっくり、あの夢の事は考えがついてからお話し申そう。夜には夢の話はしないものだが、女房たちが言い伝えているようだ」

とおっしゃって、ろくにお返事もないので、お耳に入れてしまったことを、どのように考えていらっしゃるのかと、きまり悪くお思いであった、とか。